

第 92 回公開シンポジウム

子どもの成長～おもちゃと遊び～

◆ プレゼンター

多 田 千 尋

芸術教育研究所所長／東京おもちゃ美術館館長

◆ パネリスト

前 田 豊 稔

甲南女子大学総合子ども学科准教授／美術教育学

◆ 司

会

一 色 伸 夫

甲南女子大学総合子ども学科教授／子どもメディア学

一色：第 92 回子ども学公開シンポジウムを始めます。本日は「子どもの成長～おもちゃと遊び～」というテーマです。子どもの遊びとおもちゃとの関係性、保育というフィルターを通して見ることのでられる遊びの意義、発達に及ぼす重要性に迫ります。おもちゃが内含する多角的なアプローチを試みることによって、今失われようとしている「感じる力」と「表現する力」を育てることに主眼を置き、両者がはぐくむ人との繋がりや絆にもふれていきます。

今日の基調講演は東京から来ていただきました、芸術教育研究所の所長で、東京おもちゃ美術館の館長をされている多田千尋先生です。先生のご略歴を申し上げます。先生は、明治大学法学部を卒業された後、今のロシアですが、モスクワ プーチン大学に留学をされました。併せて、科学アカデミー就学前研究所、国立玩具博物館で研究をされて、ご専門は幼児教育、児童文化などです。ご著書としては、「木育おもちゃで安心子育て」「グッドトイで遊ぼう」「おもちゃのフィールドノート」「遊びが育てる世代間交流」「東京おもちゃ美術館の挑戦」などたくさんの著書を書かれております。それから今日は、多田先生のお話に対して、別の角度でコメントしていただく方として、総合子ども学科の前田豊稔先生です。前田先生のご専門は美術教育学で研究テーマは美術的表現力の構築についての学習論です。それから私の記憶の新しいところというと、東日本大震災で被災地とこのほりということで、現地に赴きご活躍をされている先生です。

では、多田先生お願いいたします。

多田：皆さん、こんにちは。昨日から神戸に入っております、昨日は伊丹空港から 1 時間のところの丹波篠山に行っておりました。今あの地域が国も注目する林業を活性化することによっていいモデルを作ろうとしていらっしゃるキーパーソンの方がいらして、丹波篠山に行っておりました。夜遅く神戸に戻って参りまして、とてもユニークな距離感を感じました。こんなに近い距離でありながら、山と海、川上と川下、もっと言うと、森と都会とといいますか、こんなに近いの

にシンメトリーというのは、とても興味深く感じまして、2つの顔を持った兵庫を見させていただきました。

私は東京、新宿の生まれで、実は私の祖父が百年前に瀬戸内海から新宿に移ってきました。今の尾道市に属する、百島という小さな島がありまして、尾道から船に乗って15分ぐらいのところなのですが、そこを百年前に出たのです。島というのは、ひとつの掬みたいなのがありまして、人を育てられるキャパシティというのが決まっているのです。大体、三男、四男などは確実に島を出ていかないと島の人間が暮らせるキャパシティを越えてしまうのです。みんな出て行かないといけない。私の祖父も長男ではなかったので、島を出ました。最初にたどり着いたのは神戸です。神戸で何かしないといけないと思ったのですが、たまたま神戸のある一角に日本三大スラムの一つがあったのです。そこに私の祖父が入りこんでいったら、賀川豊彦という方に出会ったのです。その賀川豊彦は、生協を作った方です。その賀川豊彦に出会って「東京に私の仲間がいるので、そこを頼って行きなさい」ということで紹介された場所が新宿だった。その時の新宿は蛍の里と言われていました。とても田舎でした。ちょうど私が暮らしていたところは落合という所でした。ちょうど神田川と妙正寺川が落ち合った所で落合と呼ばれたのですが、今でもまだ染物業者などが残っています。昔の神田川はとてもきれいだった。そこに私の祖父は百年前に移り住んで、ずっと私たち多田家はそこに住み続けて、勝手に町の方が変わっていったので、何となく、瀬戸内海にやってくると、自分のふる里ではないのですが、何かDNAが騒ぐというか、何か他人事ではなくなると感じるがあります。今回、甲南女子大学で初めて講演させていただきますが、瀬戸内海の血をくんだ人間がこちらで講演をさせていただくということで楽しみにさせていた

しておりました。

私は専門が2つございます。一つは子どものことです。もう一つは高齢者のことです。お年寄りとも子どもを同時に追いかけております。そういう方は、あまり大学にはおられません。日本ですと、大体、保育の研究者は子どものことだけ、高齢者の研究者は高齢者のことだけを考えている方が多いですが、私は両方ともやることを選びました。

最初は、先ほど一色先生からも紹介がありましたように、子どものことばかりを追いかけておりました。私は生涯、幼児教育とか保育とかおもちゃ、児童文化を極めようと20代30代前半は思っていたのですが、30代前半にある方に会いました。その方が運命を決定付けた方でした。それは、当時日本大学の教授であった一番ヶ瀬康子先生です。「これからの新しい時代の専門家は子どものことだけをやってはいけません。お年寄りのこともやりなさい。幼稚園、保育園だけを視察するのではなくて、特別養護老人ホームとかデイサービスセンター、老人保健施設にもどんどん行って、日本のお年寄りたちが、特に後期高齢者になって要介護になるとどんな暮らし文化を展開しているのか、そういうところを見てきなさい」と強烈なアドバイスをいただいて、それ以来私は、両方を追っかけていくことになって、早20年が過ぎ去ろうとしているわけです。なので、2つの大学で教えていますが、全くその通りになっています。

一つは早稲田大学では、福祉文化論という授業を持っています。早稲田の校門をくぐる時は、大体、おじいさん、おばあさんのことを頭に浮かべながら校門をくぐる。もう一つはお茶の水女子大学に行っ

ているのですが、お茶の水では保育で、コミュニティ、保育資源の活用という授業をしています。私もよくわかっていないのですが、多分、コミュニティ、保育資源の活用というのは、直訳しますと、保育園がもう少し地域と繋がりが合いなさいということに過ぎないと思うのですが、大学というのは、難しく言うのが好きなのかもしれません。コミュニティ保育資源の活用というと、何か格調高く聞こえます。そういう科目を担当しているので、お茶の水の正門をくぐる時は、今日は子どもの日と、使い分けてやっています。

早稲田大学の方はもう、6年目になるのですが、今年、私の授業を履修した学生が240名います。多分この部屋の倍ぐらいの教室で授業をしているのですが、全授業の評価ブックがあり、それが書店で売られています。この何先生の何が5つ星とか2つ星というように評価がついていて、どこがいいところでどこがよくないというのを学生が評価をして1冊500円で売られています。皆4月になるとその評価ブックを買うのです。それを見ながら履修届けを出していくのです。皆さんにとっては興味深いかもしれませんが、教員にとってはとても恐ろしいです。その本をこの4月に書店で立ち読みしたのです。すると私の授業のことが載っていて、自慢話になってしまいますが、早稲田大学の人気授業のベスト3に入っていたのです。それで私は相当浮かれてしまいました。これで私も早稲田の人気講師の仲間入りだと少し浮かれたのです。そして240名の学生たちに聞きました。どうして、この授業を受けたのか聞くと、皆ニヤニヤ笑って、この授業は単位が取りやすいので有名だと言われ、それだけで私は人気授業の仲間入りをさせてもらっていたのです。この4月から私は学生に宣言しました。今年から厳しくします。10人に3人ぐらいは単位を落としますから覚悟するようと言っています。(笑) そのようなことをやっています。

今日はテーマがテーマですから、眉間に皺をよせて、真剣に考えるということではなくて、皆さん、子ども学科に所属しているわけですから、将来子どもの職業に就くことが多いでしょう。子どもの職業についたら、こんなに楽しい、こんなにワクワクするという展望が開ける講演会になれば私の役目は果たせるかと思っています。最初に自己紹介を兼ねて「東京おもちゃ美術館」の映像を見ていただこうかと思います。皆さん想像がつかないと思います。大きな箱物があるわけではないのです。そもそも作ったところが、廃校になった小学校で、そこを全面リニューアルしました。テレビの番組で「ビフォアアフター」というのがありますが、正にあの通りです。廃校になった小学校の12教室を使って、どんどんとミュージアムテイストに変えていくということにして、今年で丸6年が経とうとしています。このおもちゃ美術館、どのように日々展開しているのかを映像で見ていただいて、こんな雰囲気のところでは仕事をしている者が来ていると掴んでいただきたいと思います。

(映像上映)

多田：ここは元1年1組です。この学校は最初1000人いたのですが、新宿のど真ん中の四谷にありました。

ここは、元2年1組です。

ここは元、音楽室です。北海道から木の玉を2万個取り寄せて、木の玉のプールを作りました。これは、兵庫県と関係します。小野市、播州そろばん玉を10万個寄付してもらいました。播州そろばんの社長さんとの出会いから面白い遊びができるのです。館内には赤いエプロンを着た方たちが常に10人います。こういう方たちはおもちゃ学芸員といわれている人たちです。

ここは、元5年1組です。電池電気を使わないゲームが100種類あります。これはテーブルサッカーです。

4年に1回ワールドカップが開かれています。今度はブラジルで開催されます。テーブルサッカーのワールドカップがあって、そのついでに本物のワールドカップがあるようです。

このような小屋を20棟作りました。この小屋を大型家具を設置するかのようにレイアウトを組んだのです。子どもサイズのお茶室。三歳以上でお茶会を週に1回開いています。科学のおもちゃの部屋とか民俗学の部屋とか、クーゲルバーン、玉をころころ転がして遊ぶ小屋、他にごっこ遊びをする小屋です。このような小屋が保育園の一つぐらいあっても面白いと思います。

この学校は、実は歴史的建造物で、昭和10年の建物なのです。昭和6年に一度この学校は大火災を起こし、全部燃えてしまいました。周りの住人たちが、これでは勉強できない、せっかく素敵な木造校舎で勉強を開始したのに、できないのはかわいそうだということで、直ちに住民たちが寄付金を集め始めたのです。そして役所に持っていった。すると役所の人がびっくりした。お金が多過ぎる。こんなに多額の寄付金を本当に集めたのですか、こんなにお金があるのであれば、普通の小学校作りを止めましょう。日本、全国に誇れるようなモデル校を作しましょうということで、ドイツ人に設計を依頼して、当時としては極めて珍しい鉄筋コンクリートの4階建ての学校を作ったのです。職員室には壁にはめ込み式の耐火金庫があったりして、戦前の小学校としては、極めて珍しいプールが既にあったりと、保健室には歯医者さんにあるような椅子が2脚置いてあったりと、それはとても近代的なセンセーショナルを起こすような小学校を作ったのです。そして、奇跡的に戦災を免れたのです。戦災には勝ち抜きましたが、少子化には負けました。生徒数が80人になってしまった。1000人のキャパシティがある小学校が80人になってしまった。空き教室ばかりになった。それで、新宿区は廃校にしたい、でも住人はねばった。仕方がないということでしたが、この学校は壊したくない。住人たちのわが子のような学校だから絶対に壊したくないということで、それで新宿区は売却するという方針を切り替えて、存続することに变えたのです。でも漫然と残せという運動をしないで欲しい、残したいのであれば何に活用するのかを一緒に考えてくださいと住民たちにボールを投げ返しました。幸いにも私たちに声をかけていただいたのです。おもちゃ美術館さん引越しをしてくださいということでした。私たちはそれまで中野区で開設していたのですが、全面移転して欲しいということで、それで引越することになって、おもちゃ美術館を作ったのです。

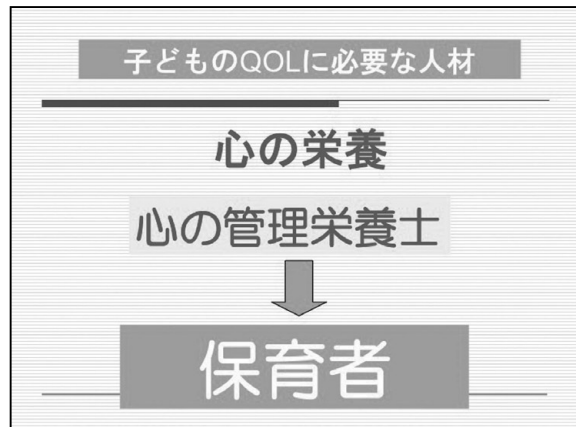
本当はいろいろと『プロジェクトX』のような話があるのですが、次に進みます。

今日はこのおもちゃ美術館の実践を通じて、私たちが考えるおもちゃとか遊びは一体どういうものを皆さんにお話したいと思います。

私は、乳幼児、子どものQOL(生活の質)を考えると、2つの栄養が大切だと考えています。一つは、

身体の栄養で、この身体の栄養を軽んじていると、いくら立派な図書室を作ろうが、いくら立派なおもちゃを子どもに与えようが、年がら年中お腹をすかせて栄養失調になっている子どもに対して、そんなレベルの高い文化財を与えたところで話になりません。もう一つ、心の栄養も大切で、こちらもなければなりません。お腹がいっぱいいただけども、心が栄養失調、ここが餓死寸前、これで生きてても意味がありません。やはり、身体と心、ダブルの栄養が満点でなければならぬと感じます。身体の栄養の方は、日本でも本気になっています。食育基本法という法律も作って、とにかく、子どもの栄養面でも気をつけていこうということを打ち出し始めました。管理栄養士とか調理師などの国家資格までとってがんばろうという専門家もたくさんいます。皆さんが将来、保育園とか幼稚園に就職した時に、管理栄養士などのプロも入っている職場も多いと思います。

一方、心の栄養は、芸術とか遊びのことで、これが正に心の栄養となります。ということは、食事をしてお腹を一杯にするだけではなくて、遊びとか芸術という食べ物も食べないと、子どもたちはすくすくと健全に育たないのではないかというのが、私たちの基本的な考え方です。ただ、身体の栄養については、管理栄養士のようなプロがいますが、心のプロの方には残念ながら国家資格がありません。心の管理栄養士というのはいません。なので、私は、心の栄養、心の管理栄養士というのは、保育者に担っていただきたいと大いなる期待をしています。それは決して保育者だけではないけれども、大いなる期待をしたいというのが、私たちの皆さんに対する期待です。私から見ると、皆さん一人ひとりは、心の管理栄養士、子どもたちの心の栄養補給をしなければならない人。身体は大きいけれども心が栄養失調気味だ、何とか私の保育の力で、栄養補給してあげなければと思っていただきたいと思います。



東京おもちゃ美術館が大切にしていることが2つあります。一つが、家族コミュニケーション、もう一つが子どもは遊びの天才だという視点です。私は、「家族は、人類が生んだ最も小さな社会」だと思っています。家族という組織体が無駄とか意味がないと思われた時代はありませんでした。例えば、鎌倉時代に家族という組織体はあまり必要がない、家族という組織は解体しようかと決定したことは年表には書いてありません。世界に目を向けても、メソポタミア文明でも、家族は一度崩壊しています。皆、一人で生き始めましたという時代はありません。どの時代をみても、家族というのは、普遍です。なくなることなくずっと続いていました。ということは、「家族というのは、最後の砦である」とと思っています。この家族さえも駄目になってしまったとしたら、それは、子どもが生きていく上、とても大きなピンチを迎える時です。でも安心はしてられません。今、本当に家族は健全なのか。若いパパやママは本当に子どもにきちんと育てきっているのか。ニュースを見ていると悲しい事件がたくさん起こります。そういうのを見ていると家族というものを、東京おもちゃ美術館では大切にしていきたいと思っています。

それからもう一つは、子どもは遊びの天才だという視点です。これは、人生の中で最も遊びの天才時期というのは、子どもの時期だと思っています。この時が人間にとって最も遊びの一流プレイヤー時代だと思っています。この一流プレイヤー時代を迎えている子どもたちに、明日も明後日も一流プレイぶりを発揮させるにはどうしたらいいのかをいつも考えて、おもちゃ美術館のいろいろな企画を考えています。

一つ目の家族のコミュニケーション、ファミリーコミュニケーションをもう少し皆さんと考えてみたいと思います。皆さんと考えていきたいのは、メディアハザードと2000時間問題です。この2000時間問題は、随分前の話になりますが、子どもを取り巻く4大メディア、テレビ、コンピュータゲーム、DVD、そして漫画・コミックとの関わりの問題です。この4つは、かなり子どもを低年齢の時から包み込んでいます。この4つとどれだけ今の子どもたちは1年間付き合っているのか。これが2000時間なのです。皆さんはどうですか。それぞれ計算してみてください。皆さんはこの4つとどれだけ付き合ってきましたか。皆さんは大体年間2000時間ぐらい関わってきた気がしますか。私はこんなに多くないという感じがしょうか。例えば、私の例をいうと、この内の2つはなかった。コンピュータゲームとDVDがありませんでした。テレビと漫画だけです。多分私は年間500時間か600時間ぐらいのような気がします。だから、今の子どもと1500時間の差があると思います。皆さんはどうでしょうか。皆さんは2000時間ぐらいいつていますか。毎日ように小学校低学年の時に、コンピュータゲームで遊んでいた方はいますか。毎日のように、ずっとテレビが点けっぱなしという方はいますか。3、4歳の頃から自分でDVDプレイヤーを操作して、ディズニーなど観ていた人はいますか。学校から帰ったら漫画を読みふけていたという人はいますか。たまには読んだでしょう。夜になると決められた時間にテレビを見ていた人もいでしょう。コンピュータゲームもたまにはしていた人がいたでしょう。そうすると2000時間には到達しません。九州、福岡のNPO法人が2000人の子どもたちにアンケート調査して出てきた平均時間が2000時間でした。この2000時間、何が問題かという、この4つは子どもをシングルプレイヤーにさせてしまう。子どもは実は一人ぼっちになると、何か友だちを探し求めたり、捜索隊に行ったりとか、いつも遊んでいた友達が家族旅行に行ってしまったら、今日の1日はどうしたらいいのかと少し真剣に考えたりするのです。小学校の校庭や公園に友だちを探しに行ったりとか、いつも行っている駄菓子屋に覗きに行ったりして、一人になるのを避けようとするものです。でも、この4大メディアができてから、あまり一人になるのを怖くなくなっている。一人でワクワクドキドキできるからです。ということは、今の子どもたちは、シングルプレイヤーとしてワクワクドキドキする時間が年間2000時間という膨大な時間を持っているということです。

これが昔と今の子どもの決定的な違いです。昔は、500時間はシングルプレイヤーになっていたけれども、残りの1500時間は友だちと一緒に遊ばなくては気が済まなかった。何か、退屈が我慢できないという時代を生きてきました。ですから人と関わる時間、揉み合う時間とか関わりあう時間が今の子どもと私が子どもの時とは1500時間違うということが言えるわけです。

では、この2000時間が果たして多いのか少ないのか。具体的な例と比べましょう。皆さんの中には、小学校の教員になる方もいると思います。小学校1年生、2年生の授業時間、年間に何時間あります

か。小学校の授業時間は1限が45分なので、45分間を授業時間で掛け算をして総分数を出して、それを60で割らないと計算できません。そういう計算式で計算をすると、小学校の授業時間というのは、3000時間ぐらいあるのかと想像していたのですが、実は、息子の小学校の時間割を計算してみると、700時間しかありませんでした。小学校の授業時間はその程度です。小学校の授業時間が700時間、4大メディアが2000時間です。多いと思いませんか。

最近、基礎学力が低下しているとよく聞きます。この基礎学力の低下に対して文部科学省が何をしているかという、この700時間の順列組み合わせを変えているだけです。総合学習のようなものを削っていった、算数、国語を多くしましょう。そしてその中に英語を入れましょう。英語も皆さんの子どもの時代になると完全に必修科目に入ってきます。700時間という小さな枠組みの中で何をしようとしているのか。私から見ると、基礎学力の低下を防ぐのであれば、こちらの2000時間を工夫して1800時間にしていく。この1800時間をどうにか努力をして1500時間にしていく。それで、子どもたちが、もっと人と関わるとかコミュニケーションをし合う、揉み合う、揉まれ合うとか、磨き合うとか、子どもが磨くなど空気感を探るといったことを学んだ方がいいのではないかととても感じます。でも、今は、国は2000時間をどうにかするよりは700時間をどうにかすることに一生懸命になっています。そして、授業時間をもっと増やそうという話もあります。折角土曜日が休みになったのですが、もう一度土曜を復活させるという話もあります。これは、公然の事実として、隔週で土曜日を復活させている小学校もあります。授業時間数を伸ばしたところで、学力が高くなるという研究はされていません。その証拠に今、基礎学力で世界一位のフィンランドでは日本の700時間よりもっと少ないのです。どう考えていくかです。いろいろ思いが馳せてしまいましたが、このファミリーコミュニケーションというものを、取り戻したいと思います。



子どもは遊びの天才ですが、子どもたちを見つめると、この天才児たちには、いくつかの特徴があるのです。一つ目は、繰り返しを楽しむ天才。この繰り返しを楽しみ天才ぶりというのは、目を見張るものがあります。例えば皆さんは幼児と付き合っていて、子どもが毎日砂場遊びをしていますが、子どもは愚痴をこぼしません。「もう砂場遊びが3日目でもう飽きてしまったよ」「今日もまた砂場なの」と愚痴をこぼす3歳児はいません。あと、絵本の読み聞かせをしますが、また、今日も絵本なのと不平不満をいう幼児はいません。今日も読んで、明日も読んで今日は特別に3冊読んでという世界です。このようなことは、私が話す以前から、皆が知っていたことです。一番良くこれを知っていた人は絵本作家たちです。特にロングセラーの絵本を出している作家たちは、この繰り返し手法を巧みに入れています。だから皆さんが思い浮かべる絵本には、どこかに繰り返し手法が入っています。あと、おとぎ話とか昔話にも必ず入っていました。桃太郎もそうです。「お腰につけたきび団子」と3回連続繰り返します。こ

れもやはり、話を聞かせたい子どもたちが繰り返しを楽しむ天才だということを皆かつての大人たちは、お見通しなわけです。

「てぶくろ」という絵本をご存知ですか。森に手袋が落ちていて、いろいろな動物が訪ねてくる。あの本も一斉に動物が訪ねてくると3ページで終わる本なのです。ところが一匹ずつ動物が訪ねてくるから長い絵本になっている。「がらがらどん」という絵本を読んだことがありますか。橋のたもとで3回出来ごとが起きるだけの絵本です。これは世界中の子どもたちに人気があります。

「おおきなかぶ」、これに至っては犯罪的です。じいさんと全員集合すれば1ページで終わってしまう絵本なのです。なのに、だらだらとするのです。17ページ目で大きなかぶが、抜けるのです。でも、幼児たちはこの17ページ目で大きなかぶが抜けるのを一週間続けて感動できるのです。私が猫のページを飛ばそうとすると娘に怒られるのです。すぐにばれてしまう。この繰り返しを楽しむ天才というのは、絶対に保育者を目指している人は頭の隅に入れておいてください。毎日同じことを繰り返すのは、マンネリ化とか惰性という言葉につながりやすいですが、子どもにとっては、毎日が新鮮、子どもの方がこの繰り返しに対して、新鮮さを紡ぎ出す力を持っていると感じています。ですから毎回この遊びの天才たちに対しては日替わり定食をどんどん出す必要はなくて、同じA定食でも子どもたちの方が、子どもたちの感性でA定食をB定食に変えていく力を持っているのではないかと思います。繰り返しを楽しむ天才たちに対して、皆さんは今後、勝負をかける職業につくというのを覚えておいた方がいいのではないかと思います。

2つ目、聞きたがりやの天才です。子どもたちは、聞くことが命のような年代です。「先生これ何」「先生、どうして」とどんどん聞いてきます。新人の頃の担任は、この聞きたがりの天才たち、20人ぐらひと一人ひとり真摯に付き合おうとしますから、一人ひとりの好奇心、質問を身体全部で受け止めようとします。家に帰るとボタンキューとなってしまいます。でもこれが、5年10年というベテランの先生になると、段々と要領がわかってくるので、聞きたがりの天才がいろいろと聞いてきたら、聞こえないふりをしたり、質問を避けたりするようです。そうやって、ベテランの保育者たちは防衛本能から、セイブするというテクニカルなことを覚えていきます。誰でも最初の1年目は体当たりで仕事をしますから、とても疲れると思います。でも、経験が力になっていきます。この聞きたがりの天才は、本当に真実を知りたいから聞いているのでしょうか。真実を解明したいから聞いているのでしょうか。

私は以前、今はもう放送していないのですが、TBSラジオの「子ども電話相談室」という番組に出ていた時があります。全国に聞きたがりの天才がいるから、あの番組は長寿番組として続いていたのです。いろいろな質問を受けました。私が最も冷や汗が出た質問があります。皆さんも遊んだこともあるリカちゃん人形です。鳥取の6歳の女の子からの質問ですが、リカちゃんが好きです。私は来年から小学校に行きます。リカちゃんは小学校何年生ですかと聞いてきました。そして、その小学生であろリカちゃんの好きな科目と嫌いな科目を教えてくださいといわれました。司会者の方が何とか答えてくださいというのですが、私は嘘を言えませんが、「不勉強で言えませんが」というと、司会者の方が「では宿題ですね」と言ってくれたのです。それからタカラという会社で電話をして担当者の方にリカちゃんは何歳か聞いたのです。「小学校5年生です」と簡単に言うのです。こんなに色っぽい5年

生がいるのかとびっくりしました。リカちゃんの好きな科目と嫌いな科目も聞くと、「音楽が好きで、算数が嫌いです」と言われました。決まっているのだと思い、びっくりしました。聞きたがりの天才は恐ろしいです。何を聞いてくるかわからない。

でも、「子ども電話相談室」は例外としても、皆さんが例えば保育園の仕事、幼稚園の仕事に就いた時に、この聞きたがりの天才と対峙することになるのですが、その時に、多分、皆さんを攻めてくると思います。変な虫を摘まんで「これは何」と聞いてきます。「この葉っぱ何」って聞いています。わからないかもしれませんね、虫や葉まで。それは本当にその子どもは真実を知りたいのですか。本当にその葉っぱの名前を知らないと夜も寝れなくなると思っていないでしょう。この子どもたちは真実の究明のために皆さんに質問をしてくるのではなくて、多分、大好きな先生のそばにいたい。だから質問という稚拙なコミュニケーション手法を使って聞いてきているのではないかと思います。子どもというのは、まだまだコミュニケーション術に長けていません。だから一問一答方式のような紋切り型で聞いてくる。そして、自分が問いかけている最中は自分の大好きな先生のそばにいられる。そのような時間稼ぎをしているのではないかと考えてなりません。でも、私の推測がもし正しいのであれば、保育者は、よき回答者になる必要はないのではないかと。どちらかというと、よき共鳴者になる人ではないか。

アメリカの有名な心理学者が、子どもの周りには最低一人以上、同じ気持ちになってあげられる大人が必要である。子どもがとても喜んでやってきたら、一緒になって喜んであげる。子どもがとても悲しそうな顔でやってきたら、一緒になって悲しそうな顔をしてあげて、向かい合ってあげる。子どもが目を丸くしてびっくりしてやってきたら保育者の方も、目を丸くしてびっくりしてあげられるよき共鳴者、同じ気持ちになってあげられる大人、これが聞きたがりの天才にとっては必要なのではないかと感じるようになりました。

そして、子どもはユーモアの天才だと思っています。掛け値なしのユーモアの天才です。まったく打算が働いていない。大人だと、このタイミングでこの言葉というように結構計算しますが、子どもの場合は計算しない。絶妙なタイミングでこの言葉というのがよくあります。私は、今でも忘れられないエピソードがあって、家に2歳7ヶ月のたくま君という遠い親戚の子どもが遊びに来た時のこと。そのたくま君が、私が昼時に何かお昼ご飯を頼もうかと蕎麦屋にたぬきそばときつねそばを注文したのです。するとたくま君は私のことをじっと睨みつけているのです。私が受話器を置いたら、たくま君の視線が受話器に移ったのです。そして、たくま君が勇気を振りしぼって受話器を自分の耳に当てました。そして、ぶつぶつ言っているのです。そして私が近くに寄って何を言っているのか聞いてみると、小さな声で「キリンさんとゾウさんをお願いします。」とずっと言っているのです。たくま君にヒアリング調査をしていないのでわかりませんが、恐らく、このおじさんがこんなにたるんだ態度でお願いをしても、たぬきやきつねが来るぐらいだから、僕が気合を入れればキリンが来るのではないかと思ったのではないかと推測しているのです。絶妙なタイミングで絶妙な一言です。これが、乳幼児にはよくあるのです。この繰り返しを楽しむ天才、聞きたがりの天才、ユーモアの天才がいると思うと保育の仕事は、とても楽しくなります。幼児教育の仕事はとてもやる気になってきます。これは是非、卒業まで覚えておいてください。

では、ここに、おもちゃ美術館から持ってきたおもちゃがあります。おもちゃ美術館の様子は映像で

見ていただいた通りで、このような考え方をしている施設が、どんなおもちゃを大切にしているか。このおもちゃを皆さんはご存知ですか。これはその辺りでは売っていません。これはアメリカのおもちゃです。オレゴン州ポートランドに行った時に、このおもちゃを見ました。ポートランドは全米のお年寄りに人気ナンバーワンの町です。いろいろな州で生活をしてポートランドに引っ越してくるという人が多いです。そのことがきっかけでポートランドに行ったのですが、おもちゃ屋でこれを見つけました。これはインディアン（ネイティブ・アメリカン）の民族人形だと思ったのです。ネイティブ・アメリカンの人形でもこのようなけしみたいなものがあるのだと思って、これは買わないといけない思い、これを2つ買いました。後でドルを円に換算すると、1個1万1千円もしていましたが2つも買ってしまいました。これを買う時に店員がこれはトラディショナルドールではありませんよ、音を楽しむためのおもちゃですと教えてくれました。これで俄然衝動買いをする気になりました。この音を聞くと皆さんも衝動買いすると思います。このような音がします。[おもちゃの音声] すばらしいでしょう。これは、ホイッスルの専門メーカーが作ったおもちゃなのです。ホイッスルだけでは儲からないので、おもちゃの世界に参入してきました。これはホイッスルが4つついています。4つの笛の音が同時になっているのです。だから、重い感じの（汽笛のような）音がします。すばらしいおもちゃです。

例えば、ある保育園の園長先生は絵本の読み聞かせをする時に必ず、この笛を吹いてから絵本の読み聞かせをするそうです。そうすることによってどういう良いことがあるか。大きな声「これから絵本を読むよ」と大きな声で呼ぶ必要がなくなったということです。笛を吹くことによって子どもたちがさっと集まってくる。

この前、特別養護老人ホームにこの笛を持っていきました。そこでこの笛を吹きましたら、能面のような真っ白な顔をして一点を見つめているおじいさんたちの目がきらっと光りました。私の方に向かってものすごい勢いで話が始まりました。「上野に着いてさ」と結論から始まるので、さっぱり解りませんが、どうして、上野に着いてしまったのですかと聞くと「青森の津軽の出で、集団就職で東京に出てきたんだ。上野に着いたら人がいっぱいいてびっくりした」と話始めました。「東京に着いたら、毎日ねぶた祭りをしているのだ」とわけのわからないことを言っていました。スイッチが入ってしまったのです。するとまた別のおじいさんが「とんな客を後ろから蹴っ飛ばしてやったのだ」と言ってきました。どうしてと聞くと、「こいつらは、トンネルの中に入っても窓を閉めないんだ」というのです。すると隣にいた23歳の介護福祉士は意味がわからず、トンネルに入っても窓を閉めないというのはどういうことですか聞いていました。トンネルに入ったのは煙を吐いて走る汽車なので、昔は窓を閉めないといけなかったと解説をしなければいけない。20代の介護福祉士と80代の入居者が一緒に生活しているわけですから、時代ギャップも甚だしいわけです。でも、そのようにして話が始まって、何がコミュニケーションの発火点になるかわからない。コミュニケーションを豊かにするおもちゃと言えるかもしれないし、回想グッズとも言えるかもしれない。そういう意味でもこれは面白いおもちゃだと思いました。

このおもちゃをご存知ですか。（一人の学生に対して）それでは、ちょっと立ってみてください。このおもちゃは輪にナットが5つついているだけのおもちゃです。でも、これは衝撃を与えるとナットが回りミツバチの羽のような音がします。そして輪を回し続けるとナットもずっと回っています。では、バトンタッ

チです。このリズムでやってください。これはどういうおもちゃかというと、これはやっている人が手をさばらせることができないおもちゃなのです。手がさばった瞬間、ミツバチが死ぬのです。だからずっとこれをやり続けなければなりません。おもちゃ美術館は、手を動かさざるを得ないおもちゃが好きなのです。積木もそうです。積木があるから、子どもは数十分間、握ったり離したり連続動作をするのです。積木がなければそんな動作をするわけがありません。積木があるから子どもは手を動かす。もっと言うと、積木が子どもの手を動かさせている。このおもちゃがあなたの手を動かさせた。あなたがこのおもちゃなしに壇上に上って、このようなことをしているとおかしいのではないのとなるわけですが、このおもちゃがあるからあなたは救われたのです。しかも、あなたの手はフル稼働した。こんなにフル稼働したのは久しぶりだと思います。

次に、これはロシアのおもちゃです。他の方、前に出てきてください。この輪を三角帽子に上手に入れてみてください。近寄って、入ればいいです。これ、結構簡単に入ると思ったら、するする避けてしまいます。ちょっと考えていますね。次の方式を考えています。あっ、入りましたね。では、それをそのままつり上げてください。はい、そういうおもちゃです。今やっていただいたのは、とてもオーソドックスなやり方です。そっと、ゆっくりして入れるというやり方でした。では、次の人、今の方とは違うやり方で入れてみてください。

これが保育です。先ほどの方式ではなくて、つぎの方式です。難しいですね。今のようなやり方でも、多分3分後には入ります。

私は、モスクワのある保育園に行った時に、正に私が同じように子どもたちから言われたのです。私は先ほどの方のようにうまく入りませんでした。別のやり方に固執してしまって、5分ぐらいやっていたら、私の周りに人だかりができました。周りにいた子どもたちは多分ロシア語で私のことを馬鹿だと言っていたと思います。もう駄目だと思って白旗をあげると、5歳児のサーシャという子どもがやってきて、僕が発明したやり方を教えてあげるといいます。サーシャはいきなり巻き始めました。私は啞然としました。このような子どもが将来この大国を支えていくのだなと思いました。これがロシア外交か、したたかだと思っていました。すると今度はナターシャという6歳の女の子がやってきて、私の発明したやり方を教えてあげるといって、いきなり、こちらでけん玉遊びを始めて、いきなりするすると通して入れたのです。びっくりしました。

要するにこのおもちゃはいかに上手に入れるかというおもちゃではなくて、何通りの入れ方があるかと考えるおもちゃなのです。このようなおもちゃがロシアは好きなのです。ロシアは寒いので、冬場、園庭がマイナス30度ぐらいになるのです。元気で外で遊ぶということはできないのです。だから、室内で指の運動を促す遊び、手の運動を促す遊び、足の運動を促す遊びがとても発達したわけです。気候風土がおもちゃの開発を変えていくことがあるのです。日本は温暖ですから、アウトドアのものもとてもたくさん生まれます。でも、冬が長くて寒いところは、室内で運動を促すおもちゃ、アクティビティ・トイが発達します。

私は心の栄養にとって大切なものは、決してこのようなおもちゃだけではなくて、絵本だとか、人形劇とか、砂場とか、絵画とか、わらべ歌などがあると思います。皆さんこの甲南女子大学に学んでい

ることは、すべて子どもの栄養のカロリー計算の仕方とか、心の栄養のバランスをどう整えるのか、栄養のメニューをどういうレシピで作り上げていくのかということを勉強しているのではないかと思います。皆さんも手作りおもちゃなどを作ったことがあると思います。正に、これは3分クッキングみたいなものです。手作りおもちゃをつくるということは、料理実習と同じなのです。皆さんが作った手作りおもちゃという食事、これを子どもにどうプレゼンテーションしていくのかということを学んでいるのです。とても大切なことをしているのです。決してレベルの低いことをしているわけではないのです。実はレベルの高いことをやっているわけです。遊びというのは、子どもにとって生活そのものです。遊びがもし、子どもから奪われたとしたら、子どもは育ちません。おもちゃというのは、実はあまり大きく評価されません。おもちゃというのは、遊びのささやかな応援団ぐらいにしかありません。だから、おもちゃがあれば、これで大丈夫という話にはなりません。おもちゃの責任は多分2割ぐらいです。でもそのおもちゃを手に持った保育者や両親などの責任は8割だと思っています。是非皆さん、子どもたちに豊かな遊びが展開できるような環境を作ったり、時にはおもちゃでスパイスを効かせてみたりして、そういう捉え方でおもちゃを見ていただければと思います。

最後に一言、今から30年ぐらい前、私が初めてドイツのミュンヘンに行った時に、おもちゃのパッケージを見たら、年齢表示が書いてありました。皆さんも見たことがありますね。私が初めてみたその表示は3歳から99歳と書いてありました。私はそれを見て、びっくりしました。これは100歳になったら遊んではいけないという意味ではなくて、ずっと一生涯、赤ちゃんでも楽しめるし、お年寄りでも手応えを感じられるおもちゃですというメッセージです。要するにおもちゃという生活道具は、ロングライフで付き合っていける生活道具であったのではないかと。おもちゃイコール子どものものではないという捉え方もできるのではないかと考えています。

これで私の話を終わらせていただきます。ありがとうございました。

一色：多田先生、面白いお話、そして、おもちゃのすばらしさを含めてお話いただきまして、ありがとうございました。それでは、これに対して、プレゼンターの前田先生、お願いできますでしょうか。よろしくお願いいたします。

前田：多田先生、どうもありがとうございます。とても面白いお話でした。おもちゃのお話だと思っていたら、子どもや遊びなど全部に関わるお話でした。私は美術教育を担当していますが、共通点がずいぶんあると思って聞かせていただきました。

私の方で準備したお話をさせていただきます。おもちゃというのは、今のお話にあったように、子どもの心の栄養になるとてもいいものですね。それなのに、日本には「おもちゃにする」という言葉があります。皆さんはこの「おもちゃにする」という言葉をどう思いますか。例えば、皆さんはとても勉強します。そのとき、ペンをよくこのようにくるくると指の上で回します。とても上手に。そういう時に、先生が「ペンをおもちゃにしていけません」と言ったりします。こういうときに言われる「おもちゃにする」という言葉。おもちゃというのは、子どもの心を育てたりする、本来すばらしいもののなのに、我々が「お

「もちゃにする」と使うとき、おもちゃという言葉のニュアンスが少し変わるわけです。どうしてそういうようにニュアンスが変わるのか、少し考えてみたいと思います。

「おもちゃにする」というのは、どういうときに使ったりしますか。（と、前列に座っている学生に問う。）

学生A：遊ぶものではないもので、遊んだりした時に使います。

前田：そうですね。遊ぶものではないのに、それで遊んだりするということですね。

（別の学生に） あなたはどうですか。

学生B：ティッシュを無意味にたくさん出したりして、本来そういうことが目的でないのに、それをおもちゃのようにして遊んでいたりすることです。

前田：そうです。本来遊ぶために使うものではないのに、それで遊んだりして無駄にしまうことですね。

でもどうしてでしょうか、おもちゃはこんなにすばらしいと話していただいたのに、我々の中には「おもちゃにする」というとき、違うニュアンスのおもちゃが入ってくるのです。どうしてでしょうね。それを、私はずっと考えてきました。これから、「おもちゃにする」ということと「おもちゃ」というもの、それらについて、考えてきたことを述べてみたいと思います。

（「おもちゃ」と書いたフリップカードを貼る。そして、その横に「お手玉」というフリップカードも貼る。）

例えばこれです。「お手玉」は「手玉」に「お」がついたものですが、それと同じように、「おもちゃ」の「お」は、後から付いた接頭語です。それでは「もちゃ」、これはなんでしょう。手に持って遊ぶものという意味で、古くは「持て遊び」。そして「持ち遊び」となり、それが「もちゃ遊び」となまり、下が省略されて、「もちゃ」となり、「お」がついて「おもちゃ」となったと言われています。つまり、「おもちゃ」とは「もち遊ぶもの」という意味なのです。

それでは、先ほどのお手玉のこと。お手玉って、知っていますか。（お手玉を2つ取り出す。）

これがお手玉です。では、実際にやってみてください。

（学生にしてもらおうと誘うが、うまく乗ってこない。）

この話をしようと思って、お手玉を購入して、久しぶりに遊んでみました。

（両手に1つずつお手玉を持って、それを右手から左手に放り投げながら回していくという方法で、お手玉をする。）

こうしてやるのが、やりやすいのです。子どもの時、多くの人は、大体このようにしてやり始めたと思います。

それが、このように、（右手で2つのお手玉を持ち、それを右手だけで交互に放り投げて回す。片手で2つのお手玉を投げ回す方法で試技をする。）

久し振りだったから、最初にやった時はなかなかできませんでした。どうしてか、投げる高さや方向

がバラバラになるのです。それがだんだんできるようになってきたのですが、それは今日の多田先生のお話の、遊びで何度もやっている内に、だんだん安定してきて、そして知らぬ間にできるようになってくる、そのことなのだと思います。私もそういう道筋を通して、このように片手で2つのお手玉ができるようになりました。つまり、遊んでいる内にたくさんの繰り返しを行っていたということです。そうすることで、不思議なことに自由にできる力がついてきたのです。子どもの頃は、片手で3つや両手2つずつのお手玉ができたのですがね。

さて、「手玉にとる」という言葉を知っていますか。手玉はこれ、お手玉のことですが、「手玉にとる」というのはどういう意味でしょう。手玉は動詞にすると、「手玉する」とか「手玉にする」とはいいません。手玉は、とるということです。「手玉にとる」という意味を知っている人は、いますか。

(別の学生に話しかけながら、)

あなたは「手玉にとった」ことはありますか。(学生はキョトンとした表情)

A君をアッシーにしたり、思うようにこき使ったりして利用するだけのことを、「手玉にとる」といいます。「手玉にとる」とは、「お手玉」をこのようにつかんでは放り投げる、またつかんでは放り投げる、このような動作、このようにおもちゃにすること、そういう動作から来ています。

次はこれです。(コマを箱から取り出して、見せる。)

多田先生やっていただけますか。コマです。

(多田、コマにヒモを巻いて、空中に回し投げて、それを手の平で受けて回す。)[拍手]

すばらしいですね。皆さんはコマを回すことができますか。こまは回すといいます。回してみてください。できる人はいますか。(学生に勧めるが、出てくる人はいない。そこで、仕方なく自分で試技をしようとする。)

私も先ほどのお手玉のように、コマを買ってきて練習をしてみたのです。(コマとヒモを手にとって、)

買ったコマにヒモがついていたのですが、小さい時の経験ではこのようなヒモではなかったと思い、自分の持っているヒモの中から記憶に近いものを持ってきました。さて、できるでしょうか。ヒモはここ(軸の頭)でぐっと留めて、こうしてしっかりとコマに巻き付けます。(といいながら、コマを回す準備をする。)

(前田、多田と同じように、コマを空中に回し投げて、それを手の平で受けて回す。)[拍手]

ところで、コマは回すと言います。くるくる回すわけです。おもちゃ遊びの動作としては、くるくる回すということになります。このコマを回すということと、もしかしたら関係しているのかもしれないと考えているのですが、「こます」という言葉があります。この言葉はスラッグなのですが、「いてこます」とか「あいつをこましてやれ」というように使います。これはあいつをやっつけてやれという意味です。好き放題にして、やっつけたりすることが、こますという意味です。だから、これはあまりいい意味の言葉ではないのです。

次は、これです。(ポケットから、おはじきの玉を取り出す。)

伝統的な日本のおもちゃ、その代表格、第三弾は、おはじきです。おはじきは先の二つと同じように、「おもちゃにする」という言葉の意味に関与してくるであろうおもちゃ遊びの基本的な動作として考えていま

す。

これはおはじきです。多田先生、おはじきをしましょうか。

(テーブルの上で多田と、おはじき遊びをし始める前田。多田が自分の玉をはじく。前田も自分の玉をはじく。多田がはじく。前田がはじく。次にはじいた多田の玉が、テーブルの上から落ちる。)

[アーという声]

おはじきはいろいろな遊び方がありますが、一対一で対戦する遊び方が、まず基本といえるでしょう。始めるときには、「あてっこ」とか「落としん」とか、自分たちで勝負するルールを相談しながら決めます。だから、いろいろな戦い方もできるのです。このように、当てたり落としたりして、勝負をしていきますが、勝負がついたら、普通は「いただき」ということになります。これは、石ころとか木の実、貨幣、消しゴムや鉛筆、キャラクターものなど何でもおはじきにできるのですが、それを賭けてはじいたりする遊びなのです。

また、おはじきにはこういう遊び方もあります。

(おはじきの玉を7～8個取り出して、テーブルの上にばらばらと流すように、軽く投げ広げる。)

双方がおはじきを5～6個ずつ数を決めて出しあって、じゃんけんで先攻後攻を決めます。先攻は、このように全部を投げ広げます。そして、「今からこれとこれを当てるよ」ということを宣言するように、玉と玉の間に指で仕切りの線をひくのです。その時には、指などが玉に触ってはいけません。仕切りができたなら、その仕切られた玉しか当ててはいけません。(前田、仕切りをして、狙ったおはじきにパチリと当てる。)

おはじきが、うまく当たりましたでしょう。そしたら、当てた方でも当てられた方でも、どちらかを取ることができます。ところが、このように外れたり、他のおはじきに当たったり、最初の仕切りに失敗したりしたらダメで、そこでストップして、後攻の人に代わるのです。また、当たったおはじきのどちらを取るかで、次に当てる玉、つまりゲームの進め方が変わります。このような方法で戦略的に進めるのが、おはじきのゲームなのです。そして、おはじきを最後の一つまで取りあっていくのですが、最後には一つ残りますね。これがそのおはじきだとしたら、これをもらうためには儀式があって、その儀式に成功しないともらえません。儀式は、人差し指と中指を2本、目をつむったまま3回そのおはじきの周りを円を描くように回してから、広げた2本の指の間におはじきを触れないように通すのです。それをうまくできたら、最後のおはじきがもらえます。このように遊ぶのが、おはじきという遊びです。また、おはじきに使うものは、このようにできるものなら何でもよいのです。だから、お金などを使うこともあります。このように、指でパチンとはじいたり、賭けのようなやり取りをしたり、勝手な儀式のようなものをしたりして遊ぶのが、おはじき遊びです。

おはじきは、はじくという動作そのものが、遊びの名前になっています。お手玉は手玉に取ったのです。コマはくるくる回しましたね。このようなやりたい放題なイメージを持つ動作をすることが、「おもちゃにしている」ということになるわけです。だから、そのようなことをしては駄目ということになるのでしょう。でも決して、それだけで、「おもちゃにする」という言葉のイメージができたわけではありません。

おもちゃにするという言葉は、おもちゃにしている人の立場から言っている言葉ではないのです。それ

を見ている人、離れている立場からいわれている言葉です。そこでは、他に正しいやり方や適したやり方、こうすべきやり方などがあって、そんなことをしてはダメだろうと離れた立場であるあちらから異議を申し立てているのです。それに対して、こちらは、おもちゃにしている人の方は、たたいたり、はじいたり、回したり、つかんだり、放り投げたり、こねくり回したり、変な儀式を作ったりして、自分勝手に友達と遊んでいるということになります。そういうことで、「おもちゃにする」という言葉は、おもちゃにしている人が、自分の動作や気持ちを述べている言葉ではなくて、おもちゃにしている人を見て、他の人がそれはいかんだろうと否定的に使っている言葉なのです。非難などをするときこの「おもちゃ」という言葉が使われるものだから、「おもちゃ」がだんだん悪いイメージの言葉になってしまったのではないかと考えています。本当のことを言うと、決して悪いイメージの言葉ではないと思うのですがね。何となく、うしろ暗い、悪いイメージにされてしまった「おもちゃ」という言葉を、本来の良い意味で使いたいですね。私は皆さんに、これからは、世の中のいろいろなものごとをおもちゃにして、楽しんでもらいたいのです。でも、おもちゃにはならない方がいいでしょうね。

つづいていきますと、おもちゃにする動作には、つかんだり放り投げたり回したりはじいたりするような動作だけでなく、イメージを使って「おもちゃ」にすることもできるのです。

これは、先々週に、学生が自分たちで作ってくれたのですが、お箸が人形になって、仲間と一緒に手をつないだ人形、こんな人形がたくさん、今美術室に飾ってあります。(箸でつくった人形を見せる。)

それから、3年生の人は知っていると思いますが、私の登山用の靴下、私の5本指の靴下、私のボタン、このようなもので、面白い動物を作りました。靴下や布の端切れ、服の一部やボタンを使って、かわいい面白いぬいぐるみの人形、「ぬいぐるい」を作ったのです。(「ぬいぐるい」人形のワニや猫などを、数種見せる。)

「おもちゃにする」のもう一つの大事なことは、いろいろなものに見立てたり想像したりして遊ぶ、イメージでおもちゃにする遊びです。自分の方からイメージすることによって、作ったり可愛がったりして遊ぶようなことができます。そのようにイメージを使って遊ぶと、「おもちゃ」は、もっと広がりをもっていくことができます。

それでは、私は、これ、この黒板をおもちゃにしてみたいと思います。これを生き物に変えましょう。(ポケットから、目玉のシールを二つ取り出して、黒板に貼りつける。さも動物の顔になるように。)

[会場から、「あっ」という声]

生き物に変わりましたでしょう。人のイメージは、ここまで行くことができるのです。想像や空想することを、止めることはできません。人は、ここまで「おもちゃにする」ことが、できるということです。

皆さんに期待をしたいことは、結局、多田先生が最後におっしゃったことかと思います。

子どもは遊びの天才とおっしゃいました。遊びの天才の時期は、子どもの時だけだと言いますが、それではつまらないですね。大人になって、賢くなって、身体も大きく強くなって、いろいろなことができて、可能性も広がって、それでも遊ぶことをする。いろいろなものを、「おもちゃ」にして楽しめる。イメージは留まるところなく、広げていける。そのような人になってほしいと思います。しっかりと、世の中を「おもちゃにして」暮らしていただきたいと思うほどです。だけど、決して、おもちゃには、なってはいけ

ません。

では、これで私の発表を終わります。

一色：前田先生、どうもありがとうございました。では、多田先生からコメントがございましたらお願いします。

多田：今、前田先生から「おもちゃにする」というメッセージが張ってあって、いろいろなことを思い出しました。おもちゃという言葉を使っているもので、誉め言葉でない表現があります。「そんなおもちゃみたいなもの」「おもちゃみたいな壊れ物」など、おもちゃと付けるとけなし言葉になってしまいます。一番ひどい言葉が「私はおもちゃにされた」です。これは世界共通なのかと思い、モスクワに行っていた時に、寮にいた外国の学生に聞きました。ロシア人に聞いた時は、ロシア語でおもちゃは「イグルーシカ」というのですが、「私はイグルーシカにされた」という言葉を使うかと聞くと、どういう意味なのか、ときよんとしていました。日本ではあまりいい言葉ではないが、そのような表現方法があると、どう思うかと聞いてみると、ある人が、私はイグルーシカにされたというのは、私は大切にされたという意味ですかと言われました。私はびっくりして、真実を答えられないぐらい恥ずかしい思いをしました。おもちゃという言葉はどこ国に行ってもあるのだけれども、そのおもちゃ文化の高さ低さはあるのかと感じました。

2つ目に思ったのは、前田先生が示していただいたおもちゃが伝承玩具、伝承遊びの部類で、昨日今日始まった遊びではありません。ここ関西でも、ずっと300年ぐらい前から続いているおもちゃのお話をしていただきました。おもちゃはとても幅広いと思います。

私は、グッドトイという選考会をしています。日本で売られているおもちゃの中でいいおもちゃを年間40個ほど選ぶ。皆さん本屋さん大賞というのをご存知でしょうか。これは書店の方が選ぶのですが、私たちはおもちゃコンサルタントという資格をもった方が選びます。26年ぐらい前からおもちゃコンサルタント養成講座を開いていて、全国に5千人位います。その内の5%は学生です。そのおもちゃコンサルタントに10票の投票権があって、皆でグッドトイを選んでいきます。選んでいる者から言うと、実は、本当の贅沢なグッドトイというのは、おもちゃ屋さんでは売っていないのではないかと思います。

最も贅沢なグッドトイは私は第一義的には、保育者とか両親、祖父母の手と声と顔というのが最も贅沢なグッドトイではないかと思います。例えば、手で赤ちゃんのお腹を撫でると、手のひらはスキンシップトイになります。「ベロベロバー」というと、声はコミュニケーショントイになります。膨れた顔などを見せるとこれは、ビジュアルトイになります。体がいろいろなおもちゃになります。ドイツの木のおもちゃにこだわる前に、手と声と顔が、実は最も贅沢なおもちゃなんだということを知ってもらいたいです。

2つ目のグッドトイは、今の手と声と顔に甲乙つけ難いのですが、自然物だと思っています。土とか砂とか小枝とか葉っぱとか川原の小石など、そのような自然物も贅沢なおもちゃです。もし、子どもたちが雑木林で、ワクワドキドキ遊んでいる子どもがいたとしたら、その子どもたちの方が遊びの偏差値が高いのではないかと思います。コンピュータゲームでしかワクワドキドキできないという子どもは、

遊びの偏差値は低いのではないかと思います。ですから、手と声と顔もおもちゃだし、自然物も贅沢なおもちゃ、そして、今示していただいたお手玉、コマ、おはじきだって昔から続くグッドトイですし、そういうおもちゃの中におもちゃ屋さんで売られているおもちゃも実はある。ともすると、トイザらスやデパートでしか売っていないおもちゃしかおもちゃと感じない感性になっているかも知れません。ですが、懐の深いものがおもちゃ文化だと思います。前田先生のお話を聞いて、改めて気づかされました。

一色：ありがとうございます。では、学生の皆さんで、質問やコメントなどがありますでしょうか。

学生 A：多田先生、どうもありがとうございました。今日のお話を聞いて、文化が広がって行って、この前テレビを見ていたら、スマートフォンのおもちゃが出たということで、おもちゃもたくさん増えていくと思います。その中でも多田先生はいいおもちゃというか、その辺りを見極めていくということがあると思うのですが、そのいいおもちゃの条件を教えてくださいと思います。

多田：とても難しい根源的な質問ですが、コミュニケーションを豊かにするような道具、これは、いいおもちゃだと思います。それはおもちゃが決めるのではなくて、人間の方が決めるのです。例えば、ジグソーパズル。皆さんは夜な夜な一人で達成感を味わうためにやっていると思います。ジグソーパズルは一人で暗く遊びものだと思っているかもしれませんが、アメリカの方では、家族皆で遊ぶものだと思っているのです。家族4人でジグソーパズルをすると世間話に花が咲きます。家族でジグソーパズルを1時間黙々と作業に徹する家族がいたら気持ちが悪いです。必ず、話をしながらします。そうすると、ジグソーパズルは一人遊びをするおもちゃのように見えて、ちょっとした演出を変えるとコミュニケーションを豊かにするおもちゃにもなります。ですから、おもちゃの方の責任論は2割です。人間の方の責任論が8割です。ということで、コミュニケーショントイというのが一つです。

2つ目は、手の運動、指の運動を促すおもちゃを大事にしたいと思います。特に、先ほど、前田先生が展開した遊びは、親指と人差し指と中指、この3本指が主人公になる遊びというのが、伝承遊びの原理原則です。この3本指を鍛えるときっといいことが待っています。3本指をフル稼働すると、生活に跳ね返ってきます。ボタンを上手にはめられるとかひもが上手に結べるとか上手に靴下が履けるようになるなどです。3本指をフル稼働する遊びをしないで、簇だけで箸を持たせようと訓練させたりせず、どんどん遊びで指をフル稼働させる。そうすれば、黙っていても子どもは生活がしやすくなる。遊びを豊かにするととてもすばらしいプレゼントが待っています。このようなことも念頭をおいてください。もっと知りたい人は東京のおもちゃ美術館まで来てください。個人指導いたします。

前田：ここに大学生の方がたくさんいますが、私は、甲南女子大学を「おもちゃ」にしたらいいいと思っています。裏山に里山はありますし、ツリーハウスもあります。少し前には IKKO さん

がやって来て、楽しい話をいろいろしてくれました。いろいろな施設がありますし、なかなか面白い人、先生や仲間が沢山います。友達と一緒にになにかをやったり、いろいろと話をしたり、秘かにつくったり、サークルやクラブに参加したりして、大学をもっと「おもちゃにして」遊んだらよいのです。皆さんは今、いろいろなことができる時期ですから、しっかりと大学を「おもちゃ」にしたりして、遊んでほしいと思っています。

一色：では、ここで第一部を終了いたします。

【休憩】

一色：第二部を始めます。ここからは、メインはディスカッションですが、多田先生、前田先生からなにかお話がございましたら、お願いしたいと思います。

多田：実は、健康な子どもばかりではありません。おもちゃ美術館では、病気になった子どもたちに来てもらうことはできません。そういう子どもたちのところには、こちらから出かけようということで、移動おもちゃ美術館セットというのがあって、いろいろな病院に出かけています。2トン、4トントラックに詰めて出かけます。それで、このようなセットを病棟に設営すると、たちどころにプレイコーナーができあがります。おもちゃの力をどのように有効活用するのかということで、このようなセットがあります。木工職人たちにどんどんオリジナルのものを作ってもらっています。例えば、点滴台とかストレッチャーとかCT スキャンなどを木で作るのです。このようなごっこ遊びを普段からしておくと、いざ本番の検査の時に過剰な恐怖心が起きなくなる。このようなことをやっておかないと、CT スキャンで検査する度に3歳児などは、殺されてしまうのではないかと思うぐらい恐怖心が募ります。ですから遊びの力を借りて過剰な恐怖心を払拭するというのも大事な役目としてやっています。

先ほどいいましたおもちゃコンサルタントの資格を持った人がいろいろなおもちゃを持って、病院巡りをしていくという活動をしています。

また、「赤ちゃん木育ひろば」という赤ちゃんサロンを美術館の中に作りました。元は理科室でした。ここは、杉の力を借りています。実は杉というのは、日本の中でもとてもやわらかく暖かい材なのです。赤ちゃんがゆったりとハイハイするのに、杉はとても適しています。それで全国10箇所杉を使って、赤ちゃんサロンを作りました。例えば、宮崎の飢肥杉、熊本の小国杉とか京都の北山杉、吉野杉とか日光杉とか秋田杉などを作って、赤ちゃんのサロンを作りました。このように200年ものの杉をくり抜いてトンネルを作ったりしました。これが本当に子どもにとっていいのか悪いのかをきちんと研究調査してみようということで、つくば大学や埼玉大学の研究チームに入ってもらい効果測定をしています。近くの新宿区内の子育て支援センターとおもちゃ美術館の赤ちゃんサロンとを比較考査してみました。

するといろいろなことがわかったのですが、特に3つ面白いデータがでました。一つ目は、赤ちゃん

が泣かないで、目をキラキラしながら遊んでいる。他の子育てセンターに行くと、泣いている赤ちゃんがいるのだけれども、赤ちゃんサロンでは泣かない。どうして泣かずに遊ぶのか、もしかすると木の力があるのかもしれないということがありました。

そして、パパの滞在時間が長い。他の子育て支援センターに行きますとパパの限界は30分です。30分経つとそろそろ帰らないと渋滞するなどと言って帰る口実を見つけてくださいます。しかし赤ちゃんサロンではずっと居座り続けます。3つ目の特徴は、ママが携帯電話を使わない。赤ちゃんが目をキラキラさせて遊んでいると、わが子に目を奪われる。他の子育て支援センターに行くと、壁際で携帯電話を使っている人が多い。それらが評価されていました。そういうことで最近のおもちゃ美術館は世界の各国のおもちゃの外に、このような体感施設での木育を展開しています。五感に刺激を与える最もいい素材は木で、特に国産材の木のおもちゃにこだわり、昨日も丹波篠山に行っていたのです。日本は、皆さんはお気づきかどうかわかりませんが、世界第3位の森林大国です。国土に占める森林率が世界第3位です。第1位がフィンランド、2位がスウェーデンそして日本です。でもフィンランドとスウェーデンの人たちは、結構、森と仲良く付き合っています。週末になると湖のほとりの別荘などによく行っています。でも、皆さんの周りの人で週末になると湖のほとりの別荘に行っている人はあまりいません。どうして、フィンランドとスウェーデンと日本、森林大国の仲間なのに暮らしぶりが違うのでしょうか。そして、実は、材がとても豊かな国です。自給率が120%ぐらいのとても豊かな材も持っているのです。もう一つは、日本は世界屈指の巧みの国です。こんなに木工技術、職人の技のレベルが高い国はありません。ということは、材が豊かで優れているのに、メイドインジャパンの木のおもちゃがほとんどない。自給率3%を切っています。この国はほとんど木のおもちゃを作っていません。ほとんど外の国に作らせています。そういうこともあり、私たちは、国産材で日本の職人の方たちに力を発揮してもらおうということも応援しています。ウッドスタート宣言を各市町村にしてもらい、うちの町は地産地消の木のおもちゃを誕生日のお祝い品として配りましょうとか、うちの保育園は内装の木質化を図っていきましょう。小学校はすべて地産地消の机でやりましょうなど、そのようなことを力強く約束してくださる市町村を増やしている最中で、今ここに加わってあと2つぐらい全部で12ぐらいの市町村が加わってくれています。兵庫県で第一号を丹波になってもらおうと、昨日も丹波に行って、そのことを打ち合わせにっていました。いつか丹波市長に会ってウッドスタート宣言をしてもらおうと思っています。丹波がしないでどこがするのですかということで攻めたいと思っています。

以上です。

一色：では、皆さん方からコメント、質問がございましたら、挙手をお願いします。

一般 A：大阪から参りました。12月に入り、クリスマスシーズンとなりまして、今さまざまところで売り出しをしている子どものおもちゃの中でデパートに売っているクリスマス向けのおもちゃの中には、今日、先生が持ってこられたようなおもちゃは売っていません。電池で動いたり、光ったりするおもちゃがばかりでまたそういうおもちゃは値段が高い。先生が持ってこられたよ

うなおもちゃはいいなと思いますが、このようなおもちゃは手軽に買う場所が少ないと思うのですが、それは流通の関係でしょうか。

多田：確かに少ないです。兵庫県内でもないことはありません。芦屋でも神戸でも専門店は必ずあります。ただ、あまりにもこじんまりとやっているの、目に付かないだと思います。ヨーロッパの木のおもちゃを扱っているとか、日本のおもちゃ職人のものを扱うようにしようとかこだわりのあるお店は、全国で500店舗ぐらいはあるはずです。私は、そういう踏ん張っているおもちゃ屋さんが町にあるとしたら、なるべく地域の方たちが買って、お店が10年20年続くように支援をしないと、なかなか難しいと思います。要するに光るおもちゃとか刺激的に音が出るおもちゃなどを私は、決して悪いおもちゃとは思っていません。要するに日常食と特別食みたいな違い、主食とおやつみたいな違いだと思っています。ですから、光ったり音が出たりするおもちゃはどちらかというと、おやつのように与えればいいのかと思います。そして日常食、子どもたちの血となり肉と成り得るものは、専門店やデパートでも光ったり音がせず売られていますので、そういうものを選ばれたらいいと思います。お菓子のようなおもちゃが日常食になることが一番いけないのではないかと考えています。それは、クリスマスケーキを毎日食べようかということになってしまいます。毎日クリスマスケーキを食べさせるのは適していない。でもクリスマスの時にクリスマスケーキを食べさせるのはいいことだと思います。というように、食事に例えておもちゃのことも考えればいいのかと思います。きっと、この近く、芦屋などには確実にあります。少々値段が張っても子どもにはいいものは買おうという方がたくさんいらっしゃると思いますので、そういうところには必ずあると思います。

一色：他の方で質問などございますか。

一般 B：先ほど、前田先生からご紹介をいただきました、大学の裏山でふれあいの森作りをしているNPOの者です。多田先生、前田先生のお話を伺って、子どもにとって身体の栄養と心の栄養ということでしたが、私たちは、木の景観保全と環境保全、学校に近くて周りに幼稚園、保育園住宅街があって、近隣の子どもたちが近くの身近な自然の中で遊んでもらえる環境になればいいと思っています。当然ここは、六甲山の山麓なので、斜面が急なので、遊びの中にリスクはありますが、体が少しでも健康になればいいという、促せるような環境を作っています。イベントなどで希望者の方たちが親子で来られますが、初対面の子どもたちが多いわけですね。その子どもたちは、皆仲良く、競争もありますが、助け合って、お父さんお母さんとのコミュニケーション、同じ年齢の子どもたちとコミュニケーションを図って何かを作っていくとかような環境を促す活動にしたいと思っています。つい先日にも近くの幼稚園の子どもたちが来て、ツリーハウスとかその周辺の斜面を滑ったりして大騒ぎして元気いっぱい遊んでいって、帰りもとても大きな声で楽しんでいて、来る時と帰る時が全く違うということを今日の話を聞いていて余計に実感し

たのです。もう少し言わせていただくと、総合子ども学科の学生さんとか、人間環境学科の学生さんもう少し来ていただいて、折角このようなすばらしい環境がありますので、皆でオブジェを作るなどのイベント、そのような時は我々はいささせていただきますので、そのようなモニユメント的な催しをやってもらえればもっと盛り上がるかと思いました。

一色：昨日も学生たちとツリーハウスに行きました。ただ、全体的にみると学生たちはそんなに行っていません。里山のようなすばらしいところ、多田先生のおっしゃっていた沖縄のやんばる森の美術館などが各地にできると、子どもたちにとって、そして大人にとってもまた新しい好奇心がどんどん生まれてくると思います。多田先生、やんばるのお話をしていただけますか。

多田：今のご発言と前田先生の最後のお話で、甲南女子大学自身でワクワクドキドキすることと、おもちゃ化するべきではないかというのは、つながりあっていることではないかと思いながら伺いました。

沖縄にやんばるの森という琉球王朝を支えてきた森が、実は沖縄本島の北端の国頭（くにがみ）村というところにありまして、その森の中に「森のおもちゃ美術館」を作りました。やんばるの森の生物多様性をどう遊びとかおもちゃにいかしていくかということで、なるべく現地のイヌマキとか琉球松とかイタジイとかを使いながら積み木を作ったり遊具を作ったり、ミュージアムの空間構成したりしています。私たちから上の年代の方は、森とittedだけでワクワクする。ところが今の若者たちは、森というフレーズだけでは、ワクワクしない。多分それは、子ども時代に森でワクワクした原体験を持っていないのが理由になっているのかと思いますので、私は是非、甲南女子大学で特に1年生の時に、折角、里山があるのですから何か授業の一環としてワクワクさせておけば、後は2年生3年生になっても、何人かの学生は、引き続き通い続けるのではないかと思います。うまくどう仕組みとして取り上げていくかも大事なのかと思いました。

一色：前田先生、何かコメントございますか。

前田：その通りだと思います。知らなかったら本当にわからないです。どこかでお腹の底からよかったと思えば、またいつか戻ってくる気がします。

山ソックスの話をしたんですが、我々が若い頃は、何かといえばピクニックをしていました。だから、少し時間ができた時、15年ほど前からなるでしょうか、高齢者に山登りのブームが起きました。今は若い方も山登りをされています。15年ほど前の時は、若い人は山に全然いなかった。年寄りだけが山で遊んでいて、それを見ながら若い人が少しずつ増えてきて、今は若い人たちが山に来てくれるようになりました。そういうのが、実際にあるわけですから、身近な森を活用したり遊んだりするのは、うまくできる高齢者がまずしっかりと遊んでおく。その中で、自分も参加をしたいという若い方がきたら、それにお教えするというところから始まったらいいいのではないかと思います。

我が家は森の中にあるのですが、今朝、大学に来る前に、石垣に伝っていた太いツタがちぎれて、垂れ下がっていました。これは変だなと思い、妻を呼んで、泥棒でも入ったのだろうかと話していたのです。太いツタは3メートル分ぐらいちぎれて、取られていました。考えていくうちに、これは、もしかしたらリースでも作ったのではないかと想像するようになりました。そうしたら、なんだか許せるような、ちょっと嬉しいような気持ちになったのです。泥棒でなくてよかった。リースを作ったのならいいかという気持ちになって、ついには、残っている分でうちでも何か作ろうかということになりました。泥棒騒ぎではなくて、リース騒動ということで、一件落着し、いい形になったのです。そういうように、自然への愛着は共感しやすいものなのでしょう。そういう土壌が、われわれには根っこにあると思います。

一色：ありがとうございました。今日は遠方からいらっしゃっている方もいます。奈良からお出でいただきましたこだま保育園の園長先生で美術に関心を持たれている先生です。何かご意見ございましたらお願いいたします。

国原：今ご紹介いただきました奈良のこだま保育園から参りました国原です。実は私自身も、おもちゃコーディネーターの資格を持っていたりします。多田先生がおっしゃる通り、おもちゃを使って子どもたちに正解ではなくて、それを使ってそれをどう繋げていくか、どうコミュニケーションをとるのが大切だということを伝えていく役目だと思っています。私の園では、0歳児から就学前の子どもさんと小学生の子どもさん、学童保育をしています。今日はいろいろなお話を聞かせていただいて、子どもを育てていくこととはというところで捉えるのであれば、今の子どもたちは、たくさん楽しいことがある。たった700時間の勉強時間に対してメディアを2000時間も見てしまう。私たちの課題の中で見えてきたものは、保育園時代、幼稚園時代に遊び残しをした子どもがたくさんいるということです。その遊びというのは、おもちゃでの自分の体験であったり、外で遊ぶこと、またはその中でのコミュニケーションがなかなか難しい子どもさんが増えている。早期教育にかけてのものであるのか、その遊びというものがたくさん今の情勢で制限されるのかというがまだ私の方ではしっかりした答えは見つかっていないのですが、そういうものが今日勉強させていただいた中の一部を聞かせていただいても、確かに感じました。

こんなにたくさんいいおもちゃがあることを勉強させていただいたので、帰って保育士に伝え、また近隣の保育園の先生方に紹介をして、国産の木のおもちゃをどんどん増やしていければと思います。

ありがとうございました。

一色：ありがとうございました。他の方でいらっしゃいますか。

一般 C：大学の裏山活動をしている NPO の者です。1 点は意見を述べさせていただき、1 点質問させていただきます。

今日は多田先生、前田先生のすばらしいお話をうかがいました。想像もしなかったような発想を聞か

せていただき、また非常に言葉巧みに説明いただきましたので、興味津々として楽しませていただきました。聞かせていただくというより、楽しませていただきました。

美術館という一つの美術、主体はおもちゃということですが、同時にやはり、心の栄養というお話がありました。人、幼児が主体であるということで、極端に言いますと、何もおもちゃがなくてもすばらしい遊びができるということは、承知していますが、美術館的に、裏山の森をすばらしい甲南女子大学の美術館にしてはどうかということでした。私は、いつもあの森を一つの劇場化するというつもりです。子どもたちが森の主役であり、そして舞台装置が森である。そのようなものがないかと思っていろいろと勉強させていただいています。

多田先生にお伺いしたいのですが、食育とか住育とか衣育とかありますが、木育という言葉をお聞きして、すばらしい言葉だと思いました。もう少し、この木育について教えていただければと思います。今日初めて聞いた言葉でした。どうぞよろしくお願いします。

多田：木育という言葉は2006年に閣議決定された言葉です。食育の場合は、閣議決定で留まらず法制化され「食育基本法」という法律になりました。木育は閣議決定止まりですが、ただ閣議決定されまると、国の事業になります。所管は林野庁になります。林野庁が木育推進を唱っておりまして、私たちが4年前から国の事業を受託して全国に向かって木育を行っています。

そもそも林野庁がどうしてこの木育を言い始めたかということ、林野庁の所管というのは、川上のことしかやっていなかったのです。木をどう植樹するかとか枝打ち間伐してどう森を育てるかとか、林道をどう整備するかなど、そういうことが中心だったのですが、川下の方でどんどん木を使おうという人たちが生まれなければ、川上の方でいくら木を切っても仕方ないでしょうということで、林野庁が木材利用課という部署を作りました。林野庁が里に下りてきたのは、初めてのことです。

そして消費者の方も木を使おうという機運を高めないと林業は栄えないだろうとなりました。皆さんご承知のように、家具を買わなくなった。嫁入り道具に箆箆を買うのもあまりないと言う位、家具を買わなくなりました。どんどんと木の需要が減ってきた。それをもう一度暮らしの中に木を取り入れようということを起こして、川下の方から新しい風を吹かせようというのが林野庁の目論みです。私たちは決して林野庁の手下ではないので、私たちなりの木育というのは、もっと暮らしの中に木を取り入れましょう運動です。保育の中に木を取り入れましょう運動、暮らしの中に木を取り入れましょう運動です、他に病院などにも木を取り入れる、また空港などにも木を取り入れる。熊本空港や宮崎空港は木を取り入れて内装を木質化していています。それからJR九州は九州新幹線とかななつ星などで、木の豊かな電車を作り始めたというのも一つの流れになっています。

あと法律が改正され、公共建築物は、どんどんと木造化にしていこうという法律が2年前にでき、小学校や中学校も木造校舎が建てやすくなってきた。そういう流れの中で私たちも豊かな日本の木を使って子どもたちを育てていこうということで、木の効用、効果で、子どもたちをすくすく育てていこうというのが、最も簡単な木育の説明かもしれません。

他にはこのストレス社会の中で木の力を借りて、大人たちの癒しを求めようとか老人も木をもっと取り

入れて暮らしを豊かにしようということで、ロングライフで木の効用を活かそうということが私たちの木育の理念です。ですから、誕生日の祝い品には地産地消の木のおもちゃでと言ったのは、スタートです。なぜそこに着眼点を置いたか。例えばある女性が奈良で出産した。そして奈良の市役所から奈良の木で奈良の職人が作った地産地消の木のおもちゃを渡したら、そのお母さんは印象に深いと思うのです。それで毎日わが子と遊ぶと思います。おもちゃは家具と違って毎日触りますし、木の肌合いが楽しめますし、音も楽しめます。木との密接度が違います。するとお母さんたちは、木のにわかファンになっていきます。そうすると、6年後に学習机はやはり木にしよう、更に6年後には、家が手狭になってきたので家を買う。一戸建てはやはり木造住宅にしよう、と、どんどん広がっていくことも期待できるのです。ただ一番大切なのは、木が持っている力で子どもを育もうということです。



今日は時間がなかったので話せなかったのですが、木というのは、子どもたちの五感に程よい刺激を与えられるものだと思います。子どもは、五感で勝負をする生き物だと思います。大人ですと音を聞くか目で見るとかで情報処理ができますが、子どもは目と耳だけでは満足できませんので、触ってはいけないというもののほど触りますし、口の中に入れてはいけないもののほど口に入れます。また臭いのほどに匂いを嗅ぎたがります。五感で勝負している生き物に対しては、木という自然物が、程よい刺激を与える絶好の素材ではないか。その絶好の素材が今までは、遠ざかり過ぎていた。もっと近づきましょう。それを私たちは木育をしている最中です。

前田：国民運動にはなっていませんが、個人運動にはなっています。今日も持ってこられているのをお見せいただけますか。

一般 B：これはどんぐりのキャップの方です。裏山にはアメモキが中心です。普通のどんぐりはこのような形ではないのですが、アメモキとかクヌギの仲間はこのようなどんぐりができるのです。そのどんぐりのキャンプがシーズンには捨てるほどできるのです。それがもったいないのです。これは、一つずつ穴を開けてゴムひもを通してあります。だから自由自在です。ちょっと顔を付けたりしています。

このような自然の素材、これは加工といってもつなげているだけです。どんぐり自体が一つのおもちゃになっているわけです。これは、こうします。これはどんぐりの笛です。ここには鈴なりにあります。これは竹の素材で作りました。うぐいす笛です。先を細くすると鳥の種類が変わってくる。このような自然の材料、どんぐりの蛇のように少しグロテスクなものは子どもには魅力があるようです。

多田：とても特徴を捉えていますね。これはたくさんあるのですね。ここにいた学生が皆で作っても余るぐらいの材料があるのであったら、1年生は必ずこれを作る、2年生になったら竹笛を作ると単位が取得できるようにするなどして、何か工夫して卒業させて方がいいですね。

一般 B：アメマキのどんぐりはまん丸なのでどっと落ちてきます。でもちょっと油断をするとすべてイノシシのご飯になります。私たちは毎週来るので、もったいないと思い、この材料が溜まっています。

一色：では、他の方で質問などございますか。

一般 D：子どもができた時に赤ちゃんのおもちゃをどうしたらいいかということで、普段からいろいろと見ているのですが、気になったのが、ユラユラするおもちゃでキラキラする、例えばインドの鏡とか反射するようなおもちゃというのは、赤ちゃんの視覚にいいのかということと、赤ちゃんの視覚に対して例えば、木のおもちゃのお店に行った時に、ユラユラするおもちゃが飛行機と雲というまばらなものがいいのか、それとも同じ模様がいいのか、飾りのような玄関に置くようなちりめんのユラユラするものをゆれるおもちゃとしていいのかどうしたらいいのか常々思っているのですが、アドバイスいただけますか。

多田：要するに赤ちゃんが見て楽しめるもので、その内のごく一部でユラユラするものというのがあると思います。例えば食材に例えると子どもにとってほうれん草がいい、でもほうれん草だけでは駄目です。納豆も食べさせたいし、もやしも食べさせたい。いろいろなものがあるのと同じように、ユラユラ現象を起こすようなおもちゃにあまりピンポイントに捉える必要はないかと思っています。

生まれたばかりの赤ちゃんにとって何が苦手かという、見ることです。一番得意なことは聞くことです。それはお腹の中にいて、妊娠5ヶ月ぐらいから胎児は、もう音を聞いているわけです。お腹の中の音、お母さんの心臓の音、血流の音、胃袋の消化する音、お腹の外の音、お父さんが「ただいま」という声も聞いています。ですから出産した時には、もう音を聞くことに対してはベテラン選手なのです。ところが、お腹の中でやっていないことは生まれてからはまたビギナーです。その一つが見ることです。2ヶ月、3ヶ月ぐらいまでは、まだほとんど見る力はありません。大体、半年過ぎた頃から見るのが得意になってきます。

例えば、動きに対して目が動くようになったり、月齢が相当経ていくと、後ろから呼びかけても振り返ることができるぐらいになりますが、最初の新生児が目で追うことは無理だし、後ろの声に対して振り返ることができる新生児はまずいません。ですから、音は得意で見ることは得意ではありませんが、苦手であっても、子どもに見ることを楽しませてあげたいと思う、それだけを捉えると、キラキラ光るものは赤ちゃんの目に飛び込むのではないかとユラユラ動くものの方がよりいいのではないかと。特にそう

ということが大好きなのはアメリカの人たちです。アメリカの研究者はそういうことが好きです。見るのが苦手でありながらも、子どもの目に飛び込んでくる刺激は、ということなのかというのをアメリカの発達心理学者が研究していて、そういう研究調査から作られるおもちゃを見ると、私からみると、ちょっとおかしいおもちゃがあったりします。例えば、マンションのベランダからカラスが来ないように目玉のようなものをぶら下げたりしますね。あれはカラスの目に飛び込みやすいのと同時に、赤ちゃんの目にも飛び込みやすいそうです。そのようなおもちゃはアメリカにあったり、他にもキラキラ光るものも見たことがあります。そういうのは、よく農家が田んぼから鳥を追いつぶすために使っていたりします。それはカラスにとって見やすいということは赤ちゃんにとっても見やすいということがあります。要するに目に飛び込みやすいか飛び込みづらいかというだけのことでそれがあるわけです。

ただ、私は、そんなに焦らなくいいのかと思います。子どもは徐々にマラソンランナーのように育っていきますから、じきに見る力がついてくる。見ることをも得意になってきた時には、そんなに刺激度が高いものを見せなくても、自然におのずと受け入れられるようになる。要は、まずは得意技で勝負させてあげたほうがいいと思います。聞くことが得意な時は音、見るのが得意になったら見せるという考えの方がいいかと思います。私は、キラキラ光るもの、ユラユラ揺れるものも悪くもないし、そんなにいいものとも感じませんが、普通のものというぐらいにしか感じません。

もっと大事なものは、お母さんの顔、お父さんの顔を見せてあげた方がいいです。先ほど手と声と顔はグッドトイだと話しましたが、手と声と顔の三大グッドトイを統合すると、世界で最も普及したおもちゃができあがります。日本でいうと「いない・いない・ばあ」です。この前も子育て講座で最近お母さんたちに「いない・いない・ばあ」をするか聞いてみると、意外とやったことがない人が多いのです。では実習ということで、二人で向かい合わせになってやっていただきました。すると一番前のお母さんが真面目な顔で私に質問をしてきました。「いない・いない・ばあ」はだいたい何秒ぐらい隠せばいいのでしょうかと聞かれました。私は冗談かと思い、世界標準はだいたい3.7秒ですよと答えると一生懸命メモを取っていたのでこれはいけないと思い、そんなに隠し続けるとあかちゃんはどこかに行ってしまうですよと言いました。

顔の方がよっぽどグッドトイです。グッドトイを補完するものとしてユラユラおもちゃとかグルグル伸びるモビールみたいなものがあったり、テカテカ光るものがあるのかなと思います。

一色：ありがとうございました。

先ほど、国原先生が遊び残しをした子どもが多いという発言がありました。また多田先生から遊ぶ力が衰退しているということもありました。人間の手と声と顔という話も含めて考えますとコミュニケーションを豊かにするおもちゃというところでも先生がおっしゃいましたが、おもちゃが決めるのではなくて、人間が決めるそちらのパーセンテージの方が多いということでした。

私はメディア関係の人間でしたので、メディアが2000時間、700時間しか授業がない、その現状を誰が作っているのかということも考えてみると、やはり、大人の責任という部分が非常に大きいのではないかと思います。そこで、最後に、多田先生が世界のいろいろな方々を今年の6月にお招きして、

世界おもちゃサミットで世界おもちゃ宣言を世界に向けて発信しましたので、その言葉を申し上げて今日の講演会を終わりたいと思います。

「おもちゃ、遊びの持つ無限の可能性を活かし、子どもの明るい未来、平和な世界を創造するため、関係者が一致協力して、子どもたちによりよいおもちゃ、遊びを届ける活動に取り組むことを宣言します」というのが6月9日に発せられたのですが、関係者だけではなくて、大人が一致協力してやっていく必要があると思います。

今日はどうもありがとうございました。

多田：ちなみにおもちゃの世界も軍拡、軍事大国は1位がアメリカで2位が日本です。軍縮の方の国は、第2位がフィンランド、そしてスウェーデン、ドイツなのです。人を殺していくとか戦争がテーマのおもちゃがたくさんあります。心配されるぐらいあるというのもこれも現実です。補足しておきます。

一色：どうもありがとうございました。これで終了いたします。